

# 感染症対策に不可欠なネットワーク

## 第1回茨城県感染症対策ネットワーク研修会に参加

茨城県感染症対策ネットワークの初めての研修会が1月25日、筑波大学附属病院の臨床講義室で開かれました。県内の医療機関や保健所、県保健福祉部などから参加する中、城西病院はパネルディスカッションのパネラーとして参加し、感染症対策について発表しました。

このネットワークは、昨年7月に発足。医療関連の感染管理や予防に関する知識や技術の向上とともに、医療機関と行政、関係機関との連携を図ることで感染管理の質の向上を狙いに組織されました。

研修会は、自治医科大学附属病院の感染制御部長、森澤雄司准教授の基調講演でスタート。現在、中国から拡大している新型コロナウイルスの状況や2002年に流行したSARS（サーズ・重症急性呼吸器症候群）などについて解説。感染予防には接触・飛沫予防策と標準予防策のメリハリが必要で、感染のリスクに応じた対策を講じていくことが必要。さらに、患者さんの転院や受け入れをスムーズにするためにも、地域内での共有が必要と、MRSA（メチシリン耐性黄色ブドウ球菌）やVRE（バンコマイシン耐性腸球菌）などの感染症を例に解説しました。そして「大切なのは、標準感染予防策を完璧にすること」と強調しました。

自らの病院を調査した結果に基づき、「医療従事者の触った場所から菌が見つかるケースが多い」と指摘。「手袋をしたら安心するのか、手袋でいろんなところ



を触っている。手袋は処置直前に使用し、周りの者を極力触らないで、処置後はすぐに脱ぐことが必要」と説明しました。

パネルディスカッションは、城西病院をはじめ、中・小規模の7病院での取り組みを発表。感染予防に対する共通理解の深め方や活動状況、看護師、薬剤師、検査技師など職種別によるアプローチの仕方など、さまざまな角度から報告がありました。

2020年1月27日